

我^ワ作^レ一日^ニの食^ヲ。我^レ明日^ニ当^リに當^リて來^ル。と云^ハく空^ニて手^ヲを而^シ擧^グ。其^ノ婦^ノ問^フ曰^ク「十二年^ヲ作^シて得^ル何^ノ等^ノ物^{ナリ}」我^ハ言^{ハク}「我^ハ得^ル三^十兩^ノ金^{ナリ}」即^チ問^{ハク}「卅^兩ノ金^ハ今^ハ在^ル何^ノ所^ニ」答^{ヘテ}言^{ハク}「已^ニ在^ル福^田ノ中^ニ」種^々ノ婦^ノ言^フ「何^ノ等^ノ福^田」答^{ヘテ}言^{ハク}「施^ス与^ス衆^僧」婦^ハ便^チ縛^リ其^ノ夫^ヲ送^リ官^ニ治^ス罪^ヲ断^ル事^ヲ。大^官問^{ハク}「以^テ何^ノ事^ヲ故^ニ」婦^ハ言^{ハク}「我^ハ夫^ヲ狂^癡に^シて十二年^ヲ作^シて得^ル卅^兩ノ金^{ナリ}不^レ憐^ミ怒^リ婦^ノ兒^ヲ尽^ク以^テ与^フ他^ノ人^ニ依^リ官^ノ制^ニ鞭^ヲ縛^リ送^リ來^リ」大^官問^{ハク}其^ノ夫^ヲ「汝^ハ何^ニ以^テ不^レ供^フ給^フ婦^ノ兒^ヲ乃^チ以^テ与^フ他^ノ人^ニ」答^{ヘテ}言^{ハク}「我^ハ先^ニ上^ニ不^レ行^フ功^徳今^世に貧^窮受^ク諸^ノ辛^苦今^世に遭^フ福^田若^シ不^レ種^ム福^ヲ後^世に復^ヘ貧^ニ資^ヲ相^統無^ク以^テ是^ヲ故^ニ尽^ク以^テ金^ヲ施^ス衆^僧」大^官「是^ノ囊^婆塞^信佛^ヲ弘^メ濟^シ淨^ヲ」問^{ハク}「是^ノ語^ヲ已^ニ讀^ミ言^{ハク}」是^ハ為^ス甚^ク難^シ勲^苦得^ル此^ノ少^ク物^ヲ尽^ク以^テ施^ス僧^ヲ汝^ハ是^レ善^人即^チ脱^キ身^ノ纒^絡及^テ所^乗ノ馬^ヲ并^シ一^ノ聚^落以^テ施^ス貧^人」(石山寺本大智度論平安初期点(第三種点) 18/6~25)「人依^ルの「依^ル」にヨスキの訓あり。「エカキツクシ」のシ、「種」の訓「タナハエ」不^レ確^実。

「日本国語大辞典」よすぎ【世過】(名)世渡りをして行くこと。世渡り。生活。□すぎ。*俳諧、うたたね(1694)「相店は世過の父母よ兩隣」*歌舞伎・四天王楓江戸粧1804、二番目「大家も知らねえ顔で、何も世過(ヨス)ぎだから黙っておれば、家主をいかさまにかけるのだな」*滑稽本・浮世床二下「金銭にかはるが世の習俗、僧俗ともに身過、世過(ヨスキ)と」

「大漢和辞典」依^レ□①よる。もたれる。②たのむ。たよる。③たもつ。④たすける。⑤いつくしむ。⑥なぞらへる。⑦縁。「方言、十三」依、縁也。⑧木の茂ったさま。⑨物のさま。⑩従ふ。⑪姓。⑫承知する。よろこぶ。□①やすい。やすんずる。②月のつるまき。つるまどひ。③堂上の戸と欄との間、又、天子の御座の後に立てる屏風。④たとへる。さすとす。

資料三【速ウ】

我某甲受^テ行^フ八^戒隨^テ學^ス諸^佛法^ヲ名^ヲ持^テ為^ス布^薩願^フ持^テ是^ノ布^薩福^報生^生不^レ墮^ス三^惡八^難我^ハ亦^チ不^レ求^フ轉^輪聖^王梵^天天^王之^樂願^フ諸^ノ煩^惱盡^ク速^ニ薩^婆若^ヲ成^就」(石山寺本大智度論平安初期点(第三種点) 19/9~13)「速」の右下に「得^ル」を白誓す。

【説文】速、唐速、及也。

「高山寺本篆隸万象名義」述、達般反、及・與・韻
觀智院本「類聚名義抄」述 ヲヨホス、イタル、ウ、ユク、コホル、
野口恒重編「字鏡集」述 ウ エタリ、コホス、ユク、ヲヨブ、オ
ヨホス、イタル
「大漢和辞典」述^{ツクイ} ①およぶ。「説文」述、唐述、及也。②あ
づかる。くみする。③おふ。④とらへる。⑤おくる。

本論

古訓三題として、「髹カタヒラ・依ヨスキ・速ウ」の三つを取
り上げたが、この三語を纏めて、より大きな問題の解明に寄与し
ようと言ふ意図はなく、『石山寺本大智度論』の古点を読んで居
る間に、たまたま気がついたものを取り上げたのに過ぎない。

一 髹カタヒラ

まづ「髹カタヒラ」について説明する。この文字は見慣れない
漢字で、『大漢和辞典』にも、「音義未詳」としてあるものである
が、私は、石山寺本「大智度論」第三種点に、カタヒラと読んだ
例を見つけた。資料一の五行目に、

八萬四千の車を、皆金銀・瑠璃・頗梨の宝を以つて飾り、覆
ふに師子・虎豹の皮を以つてしき。若しは、白般(ビヤクレン)・
婆羅の宝髹・雜筋をもて莊嚴とせりき。

とある「宝髹」(ホウケン)の「髹」に、カタヒラの訓が付いて

ゐるのである。こゝは、車の目隠し兼裝飾の為に垂らす幕のこと
を言つてゐるところで、獅子や虎や豹の皮で覆ひをした上に、「白
般(ビヤクレン)・婆羅の宝髹・雜筋をもつて飾りたてた」と言
ふのである。ただし、「白般(ビヤクレン)」も「婆羅」も、私は
何か知らない。

二 依ヨスキ

次に、「依ヨスキ」について説明する。資料二の十二行目に、

我が夫狂癡にして十二年に三十兩の金を得るものを作りて、
婦尼に憐愍(せ)不して、尽く以て他に与(へ)て、人の依ヨスキ
とせり。

とある「依」にヨスキの訓がついてゐる。ヨスキを、「日本語
大辞典」に、「世渡りして行くこと。世渡り。生活。」と説いてゐ
るが、ここでは、「生活のもとで、生活費」の意味に用ゐられて
ゐる。なほ、『日本語大辞典』には、ヨスキの例として、江戸
時代のものしか挙げてゐないが、本例によつて、もっと早く、平
安初期から、しかも、学者や僧侶のやうな、上流階級の人たちの
間でも用ゐられてゐたことが明かになった。

三 速ウ

「速ウ」について、説明する。資料三の三行目に、

諸の煩惱を尽くして、薩婆若を逮て、仏道成就せむと願ふべ

し。

とある「述」の字の右に「得」の字を書き付けて、その下に「衣」の草体を書き添へて居る。「述」の字は、「得」の意味であつて、ア行のエに読むと言ふわけである。しかし、「述」の字は、「説文」に「及也」と説き、以後の辞書もすべてオヨブ・オヨボスと読んである文字である。それでは、大智度論の古点で「得」の意味にとつて、ウと読んだのは間違ひかと言へば、観智院本「類聚名義抄」以下の古辞書にもウの訓を伝へてゐる。どうしてオヨブからウが出てくるのであらう。「述」は、今日、「述捕」の熟語で用いられることが多い。「とらへる」意味から「得ッ」が出てくるのであらうか。

(本稿は、平成二十三年五月二十二日、京都大学で開催された第一〇四回訓点語学会春季大会で口述した原稿に加筆したものである。)

(おおつば へいじ 岡山大学名誉教授)

研究室受贈図書雑誌目録Ⅰ

(平成二十三年一月〜十二月)

《単行本》

『波路遙か』平岡敏夫著作目録・参考文献目録・年譜(鈴木一正

青楓舎)

《報告書》

武庫川女子大学 言語文化研究所年報(武庫川女子大学) 二二

調査研究報告(国文学研究資料館) 三一

《雑誌》

愛知教育大学大学院国語研究(愛知教育大学大学院国語教育専攻) 一九

愛知県立大学 説林(愛知県立大学国文学会) 五九

愛知淑徳大学国語国文(愛知淑徳大学国文学会) 三四

愛知大学 國文学學(愛知大學國文學會) 五十一

青山語文(青山学院大学日本文学会) 四一

葎(山崎勝昭) 二二、二四

旭川国文(北海道教育大学旭川校 国語国文学会) 二一・二二合

併号、二三

跡見学園女子大学 人文学フォーラム(跡見学園女子大学文学部人文学科) 九

歌子(実践女子短期大学日本語コミュニケーション学科) 一九

字大國語論究(宇都宮大学国語教育学会) 二二

湖の本(秦 恒平) 一〇六 一〇七 一〇八、一〇九

愛媛国文研究(愛媛国語国文学会・愛媛県高等学校教育研究会国語部会) 六十、六一

愛媛国文と教育(愛媛大学教育学部国語国文学会) 四三

愛媛国文と教育(愛媛大学教育学部国語国文学会) 四三

愛媛国文と教育(愛媛大学教育学部国語国文学会) 四三

愛媛国文と教育(愛媛大学教育学部国語国文学会) 四三